

黒羽芭蕉の館だより ⑥

黒羽における芭蕉の足跡

『おくのほそ道』の旅の中で、芭蕉と曾良は元禄2年(1689)4月3日(新暦5月21日)から4月16日(同6月3日)までの14日間、余瀨を含む黒羽に滞在しました。彼らを迎えた中心人物は、黒羽藩城代家老浄法寺高勝とその弟で同藩士の鹿子畑豊明でした。高勝は桃雪・秋鴉、豊明は翠桃を俳号とする蕉門の俳人でもあり、芭蕉は桃雪邸(黒羽城三の丸の一角)に8泊、翠桃邸(余瀨)に5泊しています。

黒羽における芭蕉の足跡としては、まず4月5日の雲巖寺詣ですがあります。雲巖寺は鎌倉時代に仏国師(後嵯峨天皇皇子)が再建した臨濟宗の名刹で、芭蕉にとっては参禅の師仏頂禪師(鹿島根本寺住職)が修



芭蕉の広場入口に立つ「おくのほそ道(黒羽)」文学碑

行のため同寺裏山に庵を設けていたという縁があったのです。仏頂「山居跡」訪問により、木啄も庵は破らず夏木立の句が生まれました。

4月9日には余瀨の光明寺を訪ねています。同寺は修験道の寺院で、住職津田源光は高勝・豊明の義理の兄弟でした。芭蕉は同寺で着想を得て、名句「夏山に足駄を拜む首途かな」を詠みました。

4月12日には歌枕「那須の篠原」を訪れ、平安期の伝説に登場する九尾の狐を祀ったという「玉藻の前の古墳」や中世武士の武芸鍛錬の場という「犬追物の跡」を巡見。翌日は八幡宮(那須神社)に詣で、地元の人から那須与一の話聞いています。芭蕉は黒羽で中世の歴史ロマンに思いをはせていたのでしょう。

また、芭蕉の黒羽滞在中の特筆すべき出来事として、歌仙を巻いたことがあります。歌仙とは36句からなる連句のことで、『おくのほそ道』の旅で芭蕉は各地の俳人らと13回歌仙を巻いています。その一回目が余瀨の翠桃邸でのもので、歌仙には芭蕉と曾良の他、桃雪・翠桃兄弟、津久井翅輪、森田二寸、蓮実桃里が参加(後半の三人は庶民。黒羽における俳壇の存在を示唆しており、こうしたことも芭蕉を長逗留させる素地となっていたのでしょう)。

問い合わせ

黒羽芭蕉の館 TEL (54) 4151

彫刻

市内で作られた作品とその作者

周遊 14

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介いたします。

この作品は、ふれあいの丘の芝生広場の南側に並ぶ彫刻群のうちの一つです。



カオスの始まり

おぶち としお 小淵 俊夫 1998年

生命、地球、宇宙、すべての始まりは混沌(こんとん)とした世界といわれるが、それは一体どんなものであったのか、人間はそれをどこまで解明できるのか、作者は自問することから始まります。球体の一部があたかも水面と化し、そこに同心円の波紋が広がり、それがまた、円盤の上に同様の波紋を描

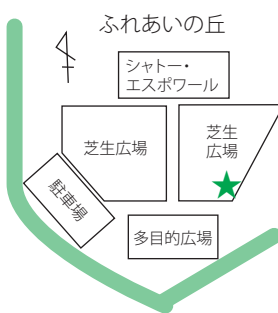
きながら浮遊しているようにも見えます。「宇宙のゆらぎとイメージの混沌」を表現したというこの作品を、ぼんやり眺めたりなでたりしながら、「色々な事に想いを馳せてほしい」と願いを込めています。

作者は1957年群馬県生まれの小淵俊夫氏。多摩美術大学彫刻科および同大学大学院を修了。現在は東京都町田市にアトリエを構えています。本市の彫刻シンポジウム後も、展覧会への出品や各地のシンポジウムなどに積極的に参加しており、近年は「古生物」や「進化」をテーマにした作品づくりに取り組んでいます。



小淵俊夫氏

設置場所案内図(★印)



問い合わせ

文化振興課文化振興係 TEL (23) 8718